平成21-23年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)
『首都圏方言の実態に関する基礎的研究』
研究代表者　木川行央

2010年度　研究概要

本研究は、首都圏の方言について、従来の伝統的方言体系を踏まえつつ、現在の動態を明らかにしようとするものである。今回対象とするのは、静岡県東部・山梨県・神奈川県・埼玉県などの地域である。これら東京周辺地域の言葉には、東京方言の古い姿が残っている場合がある。その一方で、ジャンやウザッタイなど、これらの地域の方言形式が東京で用いられ、さらに全国で用いられるようになることもある。このように東京方言・共通語を考える上でも重要な地域の言葉であるが、東京方言との類似点が多いためか、十分な調査分析が行われてきたとは言い難い。そこで、本研究はこの欠を埋めるべく計画したものである。

今年度は、上記の地域のうち、神奈川県小田原市においてアクセントや語彙・文法の調査、および自然談話の収録を行った。小田原市のことばは東京方言と共通する部分が多い。しかし、アクセントにおいては東京方言では古いとされる発音が聞かれる。また、関東地方では広く用いられるが、東京の中心部では用いられなくなった推量・意志勧誘のベーが用いられる。調査はこれらの点の究明を中心に行った。語彙については昨年度実施した静岡県松崎町や山梨県上野原市等との対比を行った。

この他に、昨年度収録した埼玉県白岡町の老年層による自然談話の文字化を行い、それにアクセント記号を付すことにより、自然な発話におけるアクセントを見る、東京方言においても、強い階級社会に属する人やそういう社会を経験した人たちに用いられる一人称代名詞「自分」について、明治期以降の文献をもとに、その使用の変遷をたどる、戦前のアクセント辞典をデータ化するなどの活動を行った。